

就鳥の唄 十鳩棕



就鳥の唄 棕鳩十



理論社

著者紹介

1905年長野県に生まれる。法政大学を卒業後
鹿児島に移り住み現在にいたる。『山窩調』
を発表し創作活動に入る。数多くの名作を生
み出す一方、《母と子の20分間読書運動》を
提唱し、その輪を全国に広げる。詩・山窩小
説・動物文学・児童文学を含めた全仕事の集
成『椋鳩十の本』全25巻（理論社）を刊行。
住所＝鹿児島市長田町26-4



0093-90234-8924

© Hatojū Muku 1983 Printed in Japan

鷺の唄

一九八三年一月 第一刷
定価／九八〇円

著者／椋鳩十
むくはとしゆ

制作／小宮山量平

発行／山村光司

発行所／株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五・六

電話(03)二〇三・五七九一

郵便番号 一六二

振替 東京九・九五七三六

乱丁・落丁本はお取替えいたしません。

印刷・堀内印刷

鶯の唄

I 山窩調

朽木 9

鷺の唄 15

盲目の春 24

山の鮫 35

黄金の秋 62

山のトンビ 68

霜の花 77

II 鷺の唄

猛禽類 87

夕立 97

打たれた鷺 102

四十雀 115

鉄砲みず 121

無精な男 127

膝の上 137

秋 145

呪婆 154

敵 159

火 180

女豹 190

春の日 194

山犬

198

若い月

210

炎颯

223

Ⅲ 夏の日抄

1 山の沙漠

243

2 電光

246

3 栗の花

249

4 驟雨

252

解説 たかしよいち

256

装画
装幀
大田 大八
平野 甲賀

I

山窩調

朽木

目を覚してみると今年始めて霜がおりていた。落葉の上に白いむくげのように細い霜が生えて、吐く息が白々とゆれながら消えて行く。

陽が出ると霜が解けて、かすかな音を立てながら幕から落葉の上に落ちた。幕の中の者は皆外に這い出して、窪地に円くなって黄色い陽を背中いっぱいにあびていた。

嘴の紅い渡鳥がもう何時の間にか来て、だいふ葉のまばらになった木の間を、こそつ、こそつ、と飛び歩きながら、思い出したように首を傾けてクーウと、鳴いた。

窪地の一人の男はぼんやり渡鳥をながめていた。冬が来て、彼をどこかの土地に又暫く縛りつけるのだ、と彼は心の遠くの方で感じた。と郷愁に似た不思議な感じが煙のように鼻の先をかす

めた。彼は大きな欠伸^{あくび}を一つして、仲間が地に穴を掘って竹の棒を四方から差し込んで、煙草をくゆらしている方に出かけて二口三口、大口にパクパクとやって、鼻の穴から二本の太い煙を象の牙のようにぬうとつき出した。そうして彼は今まで感じていた氣持を綺麗さっぱりと忘れて、和やかないい氣持で、背中の虱のあとをぼりぼりと引っ搔いた。

彼の側の女は横になって穴から煙草を吸っていたが、古くなった腰の骨や背の骨がみりみりと痛んだ。四五日前からずきずきしていたが、今朝は特別痛みがはげしかった。

彼女の目は飼い古された豚のようにしょぼしょぼしていた。煙草を吸う合間合間に何かぶつと云っていたが、誰も解るものがなかった。彼女は先刻からそこに長まって動こうとしなかった。動く事が嫌だったのだ。彼女は何か考えているのだろうか。煙草を吸う時でも休む時でも、しょぼしょぼした目で一点をじっと見つめていた。丁度、死にかけた野獸が、命の火の消えかけた瞳で空の一方をみつめて、あの脳味噌の中に、人間には解らない感情を浮かばせている時のような物悲しい様子をしていた。

陽が空の三分の一程高く上ると、天幕がすっかり乾いた。すると彼等は天幕をばたばたと折り畳んで背中に背負って出発の用意を始めた。黄金^{きん}の太陽を背中や肩に蝶々のように舞わせながら、彼等は歌ったり、笑ったりしていた。こうして出発の用意をしていると、先の方に何か楽しいものがあるように思われて、彼等の垢だらけな体の内部では、案外に明るい、野のバラのような心

臓が喜ばしげに音を立てるのであった。しかし彼女だけは、依然けだもののように横になって動こうとしなかった。反芻動物の悲しい目で、ただくすぶっている火を見つめながら、もう年を取った体は歩くにたえないことを感じていた。

——おい婆さん歩けねえのか。

仲間の一人が彼女に気づいて云った。彼女は梟のように大きな目玉をぐるぐるしただけで返事をしなかった。

——どうしたかよ！

婆さんとよく似た顔の男が彼女の側に寄って来た。彼女は始めて顔を上げて男の顔を見た。そうして振子の虎のように首を振りながら、煙草をすーと吸い込んだ。

——しめてやろうかなあ！

彼は両手でぎゅっと首を絞める真似をしながら彼女の顔をのぞき込んだ。彼女は横をむいたまま返事をしようとしなかった。彼は何もかものみ込んで、貧しい袋の中から食物と糞をひとつかみ掴み出して彼女の側においた。女達は体のきかなくなった老婆のために落葉を集めてふかふかする床を作った。婆さんは落葉の床の中に焚木^{たきぎ}ととぼしい食物と共に残された。

群は渡鳥のように山を後にして飛び去って行った。

*

太陽は落葉の床の中に、金色のちかちか光る足で飛び込んで来て、落葉は羽蒲団よとんよりもふかふかして暖かになった。彼女は其中で、冬枯れの草の根のようにうっとりとして横になっていた。陽がおちると森の中は、扇をたたむようにばたばたと暗くなった。そして彼女の心にも黒い羽がとじられて、夜のような陰鬱が垂れさがった。

彼女を残酷につつんでいる夜の奥では無数の星がぎらぎら光っていた。それは彼女の瞳のように生氣のない冷たい色をしていた。

夜は蛭むしに似た口で落葉から昼の暖かさを吸い取ってしまった。彼女はがたがたふるえて、こわばりかけた体をむりに引き起すと枯枝に火をたきつけた。火は闇を引きさいて彼女の苦しさを幾分軟らげた。

暫くたつと夜は彼女にねむりをなげつけた。彼女はあらゆる悲しみと淋しさをしばらく出して、からのチューブのようになって深いねむりにおちた。

*

朝が来た。彼女の体はあのまま硬くなってしまっただろうか。落葉の上には霜がいつぱいたまうて、鮫の歯のような霜の上には太陽が鋭くかみついていた。

が、落葉の床が割れて彼女は白い息を、細々と霜の中にはいた。彼女は生きていた。

しかし彼女は落葉のように灰色になって、彼女の血管の中では半分以上の血液が死んでいるようであった。彼女はうつらうつらしながら、二日目の夜を迎えた。

夜は針の口をして彼女を冷たく刺した。しかし、彼女はもう火を焚きに起きる元気がなかった。真っ黒い闇の中で白い寒さを感じていた。訳のわからぬ恐怖が彼女をしめつけた。これはなんと云う物悲しい恐ろしさであろう。頼るものは何一つない人間の悲しさと恐ろしさだ。彼女は目をかたく閉じて堪え忍ぼうとしたが、彼女の本能が彼女に声を発せさせた。

——おほ、ほーい。

人間のいない山の闇の中で、彼女の泣き声は腕のような木に突き当たりながら引きつってふるえた。そして長い尾を引きながら黒い谷間にすべり落ちた。

すると細長い鳴き声が彼女の泣き声に答えた。それは山彦のように遠くの峰や谷間でした。そしてその声は段々に近づいて来て三つ四つの獣の鳴く声になった。やがて彼女からあまり遠くない闇の中でふるえるように吠えた。

死にかけた彼女は始めてその声を聞いた。今までよりもっと大きな恐怖が彼女を黙らした。彼女はあきらめて死のうとしておりながら、彼女の考えていたより別な死が限りなく彼女を恐れさせた。彼女はこわばった体を無理にゆり動かして落葉を体にかけた。

かさつ、かさつ、かさつ、葉をふみつける敏捷な獣の足音が彼女の廻りでし始めた。

今まで恐怖のために何もかも忘れていた彼女は、落葉の中から手をつき出して枕元をさぐり始めた。彼女は残りの食物の一片を探るのであった。こうして彼女は間近に迫っている死を前にして、齒のない口で食物をかみくだきながら、間もなく用を便じなくなるであろう胃の腑に送りこむのであった。

彼女から一尺と離れない闇の中で、獣は狼のなき声で、勝ちほこったように、高く、長く、冷たい運命のように吠えるのであった。

*

翌朝、彼女のかわりに、血痕が落葉の上に残って弱々しい秋の蠅が一匹、静かに彼女の唯一の物質的遺物である、その赤黒い血をなめていた。